

二上山

館蔵品紹介 見どころ、ここがポイント



■ 二上層群原川累層(香芝累層)産出植物化石

香芝市指定
文化財

【収蔵資料、展示は不定期】

市指定第30号(平成21年3月19日指定)

時代: 新生代新第三紀中新世中期(約1,400万年前)

内訳: 69点(60個体)

* ほかに不明種164点(157個体)を収蔵しています。

この植物化石は、2001年2月の宅地造成工事に伴う発掘調査の一環である自然科学調査で出土した植物化石群集のうち、種類が特定されたもので、オシダ科・スギ科・ヒノキ科・ブナ科・マンサク科・ツゲ科などがあります。二上層群は香芝市内で唯一の産出地であり、今後植物相の究明に大いに寄与することが期待されます。



■ 桜ヶ丘第1地点遺跡出土の旧石器

【常設展示】

時代: 後期旧石器時代

桜ヶ丘第1地点遺跡は、昭和50年以降継続して発掘調査が実施され、約2万年前のサヌカイト製石器が多量に出土しています。また、この遺跡からは長野県霧ヶ峰産の黒曜石が出土していることから、当時の人びとの地域間交流がうかがえます。

近畿地方最大規模を誇るサヌカイト原産地の二上山地域には70ヶ所を超える遺跡(旧石器～弥生時代)が知られており、総称して「二上山北麓遺跡群」と呼ばれています。



■ 鶴峯荘第1地点遺跡土坑2出土品

香芝市指定
文化財

【常設展示】

市指定第17号(平成10年3月27日指定)

時代: 後期旧石器時代

内訳: ナイフ形石器9点を含む7, 173点

鶴峯荘第1地点遺跡(穴虫)の発掘調査で検出された土坑(約2.5m×3.2m以上、深さ約1.0m)から出土したサヌカイト製の石器群の一括資料です。

この石器群は近畿地方中央部において、後期旧石器時代に盛行した瀬戸内技法を技術基盤とする国府(こう)石器群です。その接合資料からは、瀬戸内技法の剝離工程などを具体的に知ることができ、後期旧石器時代の石器文化を解明する上で、貴重な資料となっています。



くりぬきしきがもちがたせつかんふたいし
■ 割抜式長持形石棺蓋石

香芝市指定
文化財

【屋外展示】

ふたかみ文化センター前庭

市指定第8号(平成7年3月9日指定)

時代:古墳時代後期前半(5世紀末~6世紀初頭)

法量:全長270cm、高さ56cm、内面天井高25cm

昭和45年8月、狐井城山古墳(狐井・良福寺)の前方部北東隅の外堤に接して流れる初田川から発見されました。凝灰岩(竜山石)を削り抜いて造られており、外側が薄鋒形に加工されているのが特徴です。通常の長持形石棺より舟形石棺に近い形状で、このような特異な形態は類例が知られていません。

また、二上山産凝灰岩が近くにあるにもかかわらず、兵庫県の竜山石が使われていることは、奈良盆地西端部における古墳時代の政治的動向を知るうえで、貴重な資料となっています。

(昭和46年4月以降、下田小学校で保存されていましたが、市指定に伴って、ふたかみ文化センター前庭に移設し展示しています。)



いえがたせつかんふたいしへん
■ 家形石棺蓋石片

【屋外展示】ふたかみ文化センター前庭

時代:古墳時代後期(6世紀)

法量:棟幅31cm、横幅106cm、高さ63cm

昭和46年3月、上記の割抜式長持形石棺蓋石を初田川から移転する作業中に石垣の中から発見されました。家形石棺の蓋石と考えられ、旧状の3分の1余りですが、屋根の傾斜面に縄掛突起を打欠いた痕跡がみえます。付近に横穴式石室をもつ古墳があった可能性があります。

(昭和46年4月以降、割抜式長持形石棺蓋石と共に下田小学校で保存されていましたが、市指定に伴って、ふたかみ文化センター前庭に移設し展示しています。)



ながもちがたせつかんふたいし ふくげん
■ 長持形石棺蓋石(復元)

【屋外展示】ふたかみ文化センター前庭

狐井城山古墳の南約550m、昭和44年5月の初田川の橋改修時まで阿弥陀橋の橋板として使用されていた長持形石棺蓋石(写真下右)をもとに、竜山石で復元したものです(写真上)。

東隣には、竜山石のブロック(70cm×125cm×90cm)を標本として展示しています(写真下左)。

ながもちがたせつかんふたいし
*** 参考 長持形石棺蓋石**(写真下右)

香芝市指定
文化財

【現地保存】良福寺 阿弥陀橋東詰北側

市指定第16号(平成10年3月27日指定)

時代:古墳時代中期(5世紀)

法量:石棺蓋石(西側)全長320cm、幅60cm

石棺蓋石(直立)全長146cm、幅65cm

石室天井石片(東側)全長215cm、幅85cm

長持形石棺蓋石(竜山石)を縦に半裁し、一片は縄掛突起を阿弥陀如来の頭部にみたくて地中に埋め込んで直立させています。もう一片は西側に横転させています。狐井城山古墳に伴うものかどうかはわかりません。





くみあわせしきいがたせつかん いちぶふくげん
■組合式家形石棺(一部復元)

【常設展示】

時代: 古墳時代後期(6世紀)

法量: 長さ185cm、幅60cm

この石棺は、二上山産凝灰岩の切石を組み合わせて造られた組合式家形石棺です。二上小学校の周辺から出土したものと考えられますが、その出土地や副葬品の有無などは不明です。これと同様の組合式石棺は、市内で北今市・藤山地区を中心に約6基見つかっています。いずれも石棺を直接埋めた石棺直葬墳か中小規模の古墳の石室から出土する例が多いことから、被葬者は在地の権力者と考えられます。

(以前は、二上小学校の校庭に保存されていましたが、二上山博物館の開館に伴って移設し、一部復元して常設展示しています。)



井堰遺構



井堰遺構



建築部材①

建築部材②



高床建物復元模型



建築部材③



建築部材④

かまだいせきしゆつど けんちくぶざい
■鎌田遺跡出土の建築部材

【収蔵資料、展示は不定期】

時代: 古墳時代前期後半(4世紀～5世紀前半)

鎌田遺跡は、市内南部の鎌田小学校周辺に広がる縄文から古墳時代にわたる複合遺跡です。平成4年度の発掘調査で、4世紀～5世紀前半の河道から護岸遺構と井堰遺構を検出しました。両者には一部焼け焦げた建築部材が転用されており、火災にあった建物の廃材を再利用したことが推測されます。部材は、護岸遺構から3点、井堰遺構から1点が出土していますが、いずれも加工精度や規格性が高く、その精巧な造りや大きさから大規模で特殊な建物の部材であることが考えられ、葛城氏との関係が注目されています。

二上山博物館では、1994年、これらの建築部材をもとに高床建物の復元模型を製作しました。

(設計: 宮本長二郎氏、製作: 瀧川寺社建築)



しもだひがしいせきしゆつど さいこ もくせいくら
■下田東遺跡出土の最古の木製鞍

【収蔵資料、展示は不定期】

時代: 古墳時代中期(5世紀前半)

法量: 横幅41.2cm、高さ20.2cm、厚さ1.0～3.0cm

下田東遺跡の平成15年度調査で出土した木製の鞍です。鞍は、乗馬の際に使用する馬具の一種で「後輪(しずわ)」と呼ばれる部材です。桜の木を加工し、中央と下側の7箇所を鞍を構成するための四角の穴が開けられています。ほぼ完全に近い状態で、直近から出土した土器から5世紀前半頃までさかのぼると考えられます。

古墳時代の木製鞍の出土例は17例あり、うち最古は吉武高木遺跡(福岡市)の5世紀中頃とされており、本例はそれより古く最古例となります。しかし、木製鞍は纏向5類(=布留1式)土器と伴った箸墓古墳(桜井市)周濠の出土例があり、続いて部屋北遺跡(大阪府四條畷市)や藤田新田遺跡(宮城県仙台市)などの例がありますので、木製馬具としての最古例とはいえません。





しもだひがし2こうふんしゅつど もつかん ■下田東2号墳出土の木棺

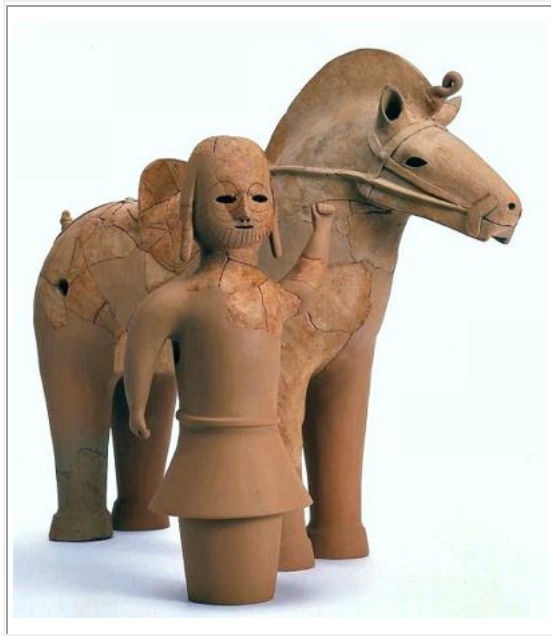
【常設展・企画テーマ室】

時代：古墳時代中期(5世紀中頃)

規模：一辺8m(方墳) 木棺材(全長290cm、幅49～65cm、厚さ7.5～10cm)

下田東2号墳は、下田東遺跡の平成19年度調査で検出されました。墳丘は削平され、埋葬施設はわかりませんが、幅1.5～2.7m、深さ0.5mの周濠底に接して組合式木棺が出土しました。コウヤマキ製で、両端に2個ずつ縄掛突起が付きます。この木棺材上の周濠堆積土は自然堆積で側板・蓋板などの痕跡がなく、棺上の盛土もないことから当初から周濠内に置かれていたと考えられます。また、木棺材下には、完形の須恵器杯身2点、杯蓋4点が置かれていました。

おそらく埋葬施設に納める被葬者の運搬具として利用され、周濠内に納められたと推察されます。



しもだひがし1こうふんしゅつど はにわくぐん ■下田東1号墳出土の埴輪群

【常設展・企画テーマ室】

時代：古墳時代中期(5世紀後半)

規模：全長約21m、後円部径約16m、前方部幅約10m、前方部長約5m



下田東1号墳は、下田東遺跡の平成13年度調査で検出された帆立貝型の前方後円墳です。墳丘の周りには幅3.5～5mの周濠をめぐらし、墳丘を繋ぐ通路状の渡り堤があります。墳丘は後世の開墾などで大規模に削平され、墳丘の盛土や埋葬施設は完全に失われています。しかし、周濠に転落した状況で多量の形象埴輪が出土し、その種類は、人・馬・鶏・家・蓋・盾などで周濠全体に点在していました。



きついでしろやま ころふんしゅつど こもちまがたま ■狐井城山古墳出土の子持勾玉

【収蔵資料、展示は不定期】

時代：古墳時代中期(5世紀後半)

狐井城山古墳は全長約140m、後円部直径約90m、前方部幅約110mの市内最大の前方後円墳です。墳丘部は未調査のため、埋葬施設や副葬品は不明ですが、数次に及ぶ外堤の発掘調査で出土した円筒埴輪や墳丘の形態などから5世紀末～6世紀前半の築造と推定されています。

この子持勾玉は古墳の所有者の採集品で、当館の開館に際して寄贈を受けたものです。



しもだひがしいせきしゆつど えんとうはにわ
■下田東遺跡出土の円筒埴輪

【収蔵資料・展示は不定期】

時代：古墳時代後期(6世紀前半)

下田東遺跡の平成19年度調査で、2個体の円筒埴輪を組み合わせて井戸枠に転用していた古墳時代の井戸を検出しました。透孔には別の埴輪片で蓋をして水が漏れないようにしてありましたが、この埴輪片だけでも数個体分を確認しています。

井戸の築造年代は、井戸枠内の出土遺物から6世紀後半頃と推定されます。



かみなか だいごうふんしゆつど ほく
■上中ヨロリ第1号墳出土の馬具

【収蔵資料・展示は不定期】

時代：古墳時代後期(6世紀後半)

旭ヶ丘東端に保存されている2基の古墳で、両古墳とも一辺15m、高さ約1~3mの方墳です。西側が1号墳、東側が2号墳で、2基が同時に築造された可能性があります。試掘調査の結果、1号墳から馬具の1つである金銅製鞍(しおで)金具が出土し、2号墳は明神山火山岩を利用した横穴式石室が確認されています。鞍金具などから6世紀後半ごろの築造時期が考えられます。



写真上：出土状態(接合のみ) 下：復元(樹脂を入れて足りない部分を補っています。)

ひらのごうふん かんだい
■平野2号墳出土の棺台

香芝市指定
文化財

【収蔵資料・展示は不定期】

市指定第26号(平成16年3月30日指定)

時代：飛鳥時代(7世紀中頃)

法量：長辺184cm、短辺72cm、高さ8cm(内)・9.8cm(外)、底面・側面厚さ1.2~2.2cm

平野2号墳は、復元直径26m、高さ6.5m前後の円墳で、南に開口する全長(残存長)約10.6m、両袖式の横穴式石室です。玄室の長さ約3.8m、幅約2.5mで、床面から天井石までの高さは約2.2mあります。玄室床面の中央部には、土を固めて築いた棺台を置くための基礎(土壇)を設けて、周囲の床面全体に凝灰岩の切石を敷き詰める珍しい構造です。

棺台は棺を保護・収納するための外容器、土製の棺台と考えられ、7世紀代の終末期古墳の埋葬形態を考えると貴重な資料になります。



にんじはらじようあと しやうりしやうこんく
■尼寺廃寺塔跡の舍利荘嚴具

香芝市指定
文化財

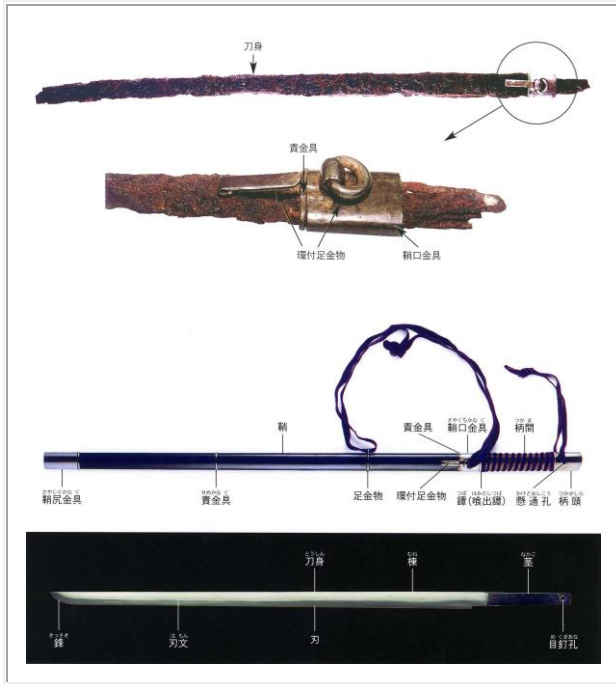
【常設展示】

市指定第24号(平成15年2月21日指定)

時代：飛鳥時代

内訳：耳環12点、刀子1点、水晶丸玉2点、水晶切子玉2点、ガラス丸玉1点、ガラストンボ玉1点、ガラス小玉1点

尼寺廃寺跡(国史跡)は、北に金堂、南に塔を配し、それを回廊で囲む東向きの法隆寺式伽藍配置をもつ飛鳥時代後半の寺院跡です。平成7年度の塔跡調査で、基壇上面から地下約1.2mで、日本最大の規模を誇る約3.8m四方の塔心礎が検出され、柱座内から耳環12点を含む舍利荘嚴具が出土しました。近年、塔心礎から舍利荘嚴具が出土した類例がなく、飛鳥時代の寺院を研究する上で貴重な資料です。



でんいまいすみしゆつどぎんそうたち
■伝今泉出土銀装大刀



【収蔵資料・展示は不定期】
 市指定第15号(平成9年3月27日指定)
 時代:飛鳥時代(7世紀中頃)

法量:刀身 残存長66cm、刃部幅2.0cm、棟幅0.5cm
 鞘口金具 長さ・幅共3.4cm、直径1.8cm(短径)・3.4cm(長径) 環付足金物 胴部長さ4.6cm、幅0.9cm、環直径1.7~2.3cm

昭和20年頃に今泉で開墾中に出土した大刀で、刀身は錆びていますが、鞘口金具と呼ばれる鞘と刀身を固定するための銀装金具が残っています。鞘口金具には環付足金物という刀を吊して身に付けるための佩用装置があります。これは、主に7世紀前半から8世紀前半の関東・東北地方に多く分布し、古代東国特有の大刀佩用装置であることが知られています。

この大刀は、県内で環付足金物が装着された状態で原形がわかる唯一の例で、7世紀の古代大和と東国との政治的関係を考える上で貴重な資料です。

なお、平成9年度文化財保護事業の一環として、河内國平氏(刀匠)、高山一之氏(鞘師)、中田育男氏(白銀師)に委託して、伝今泉出土銀装大刀復元美術刀剣を製作しました。



こくほうきんどういなのおおむらこつぞうきふくせい
■国宝金銅威奈大村骨蔵器(複製)

【常設展示】
 原品=国宝 四天王寺蔵(京都国立博物館寄託)
 時代:飛鳥時代 慶雲4(707)年銘
 法量:総高24.2cm、径24.4cm

威奈大村骨蔵器は金銅製で、中央やや下寄り蓋と身を合わせた球形の容器です。蓋には「小納言正五位下威奈卿墓誌銘并序」で始まる墓誌銘391文字が10字詰39行で放射状に陰刻されています。銘文には大村は宣化天皇4世の孫である威奈鏡公の第3子で、文武朝に小納言、侍従、太政官左小弁を歴任した。慶雲2(705)年11月、越後城司に任ぜられ、同4年2月に正五位下を授かりますが、同年4月24日、病のため越後城で亡くなりました。享年46歳。遺骨は同年11月21日、大倭国葛木下郡山君里狛井山崗(現香芝市穴虫)に帰葬したとあります。

二上山麓は多くの火葬墓が存在する地域として知られています。墓誌を伴う火葬墓は全国で16例あり、そのうち4例が二上山麓から発見されており、7~8世紀において、古代官人の公葬地として強く意識されていたことがわかります。



しもたひがしいせきしゆつどじんめんぼくしよどき
■下田東遺跡出土の人面墨書土器

【収蔵資料・展示は不定期】
 時代:奈良時代(8世紀)

下田東遺跡の平成16年度調査で検出した自然河道から、墨書土器や土馬などと共に出土しました。

人面墨書土器は、奈良~平安時代にかけて、人形(ひとがた)や土馬と同じく、罪や病を取り除くための祓いの祭祀具(道具)として使われました。

同遺跡からは、多量の人面墨書土器の破片が出土しています。



■^{しもだひがい}下田東遺跡^{いせきしゆつど}出土の^{ぼくしよどき}墨書土器

【収蔵資料・展示は不定期】

時代：奈良時代(8世紀)

下田東遺跡の平成16年度調査で検出した自然河道から、人面墨書土器や土馬などと共に出土しました。墨書土器は、一般の人が身近な生活具の土器の蓋や底などに墨で文字を書いたもので、「西」「天」「中」「十」「万」など、大半は漢字一文字が書かれています。同遺跡では翌年の調査においても大量の墨書土器が出土しています。



■^{たかやまか}高山火葬墓^{そうぼ}木櫃^{きびつ}(^{ていぶ}底部)



と^{しゆつどひん}出土品

【常設展示】

市指定第19号(平成11年3月5日指定)

時代：奈良時代(8世紀中頃)

法量：木櫃(底部) 長さ54cm(南北)、幅45.5cm(東西)

内訳：木櫃(底部)と破片3点、土師器壺2点、土師器蓋2点、土師器鍋2点、土師器皿1点、須恵器壺1点、丸靱1対、巡方1点、和同開珎31点、鉄片5点、用途不明木製品1点

この火葬墓は約1m四方の隅丸方形の穴の底に木炭を敷き詰め、その上に外容器として木櫃を納める構造です。木櫃内の北西隅に土師器と須恵器の壺(骨蔵器)があり、中央部にも火葬骨が出土していることから2~3人の火葬骨を埋葬した合葬墓と考えられます。31枚の和同開珎や奈良時代官人の象徴である巡方や丸靱などの鍔帯金具が出土しています。

古代において、火葬骨の合葬墓はあまり類例がなく、貴重な資料となっています。



■^{しもだひがい}下田東遺跡^{いせきしゆつど}出土の^{もつかん}木簡

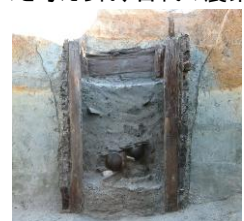
【収蔵資料・展示は不定期】

時代：平安時代初頭(9世紀初頭)

法量：長さ36.8cm、幅11.1cm、厚さ0.5~1.0cm

下田東遺跡の平成17年度調査で、一辺約1m、深さ約2mの平安時代初頭の井戸から出土しました。木簡は檜を加工した木片で、曲物の底板を転用したものと考えられます。木簡の表裏両面には、「伊福部連豊足(いふくべのむらじとよたり)」という人物が重病のため馬を飼えないことなどを綴った文言をはじめ、「和世(わせ)種三月六日」や「小須流女十一日蒔」など、稲の品種や種まきなどの作業を記した計約100文字が墨書されていました。

この木簡から、当該地域一帯には公的な施設や庄園などを管理する機関があったものと考えられ、古代の農業をはじめ、役人の生活の一端を知る上で貴重な資料として注目されています。





香芝市指定
文化財

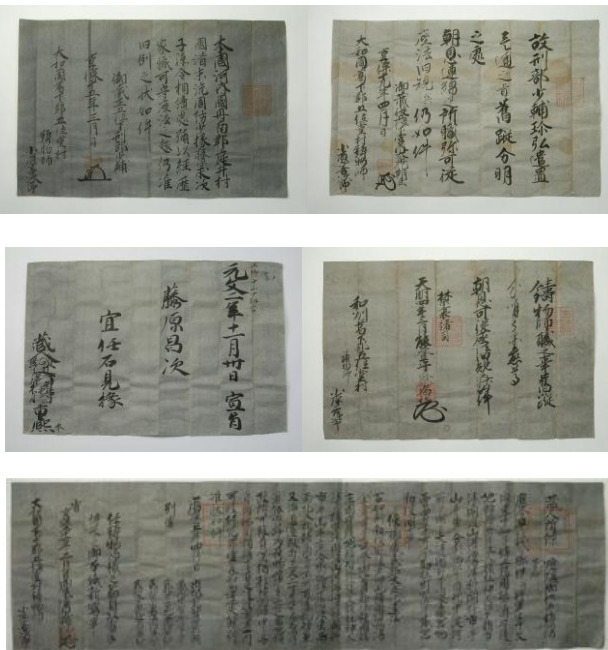
おおさかやまくちじんじやしんぞうおよ ほうもつるい
■大坂山口神社神像及び宝物類

【寄託資料、展示は不定期】
市指定第23号(平成14年3月8日指定)

時代:平安時代末期～江戸時代

内訳:彫刻 木造男神坐像、木造女神坐像(以上、鎌倉)、木造神形坐像(室町)、木造神形立像2体(不詳)、木造牛頭天王立像2体(鎌倉)、木造天王形坐像、木造弁財天立像、木造恵比寿坐像2体(以上、江戸)、木造狛犬(平安)、木造狛犬(鎌倉)、木造狛犬一对(鎌倉)、木造狛犬一对(江戸)、瓦製狛犬一对(江戸) 文書 宮座文書(室町～江戸)、大和国大坂神社記(江戸) 祭具 鉄製釜(江戸)

大坂山口神社(逢坂)には、数多くの社宝が伝えられてきました。なかでも注目されるのは平安～江戸時代まで、各時代を通じて遺品が残る彫刻です。神像は鎌倉期と江戸期に大別され、室町末期頃のものの一部残されています。また、平安・鎌倉・江戸期に分けられる狛犬は、本殿の左右に祀られ、本殿の補修や改築の度に運命を共にする性格から、本殿並びに神社の来歴を考え上で、重要な手がかりとなります。



香芝市指定
文化財

こいどうい もじかんけいしりょう
■五位堂鑄物師関係資料

おほらけもんじよ つけたり くらんどころちよう うつし
小原家文書 附 蔵人所牒(写)

【寄託資料、展示は不定期】

市指定第13号(平成9年3月27日指定)

時代:江戸時代(18～19世紀)

内訳:真継家発給許状6通、口宣案1通、東方廻章1通、蔵人所牒(写)1通

五位堂鑄物師の小原家に伝わる鑄物師関係文書です。この文書は、享保15(1730)年から天保15(1844)年の間に全国の鑄物師を統括した公家の真継家が発給した許状6通と元文2(1737)年の口宣案1通、文久元(1861)年の東方廻章1通、享保21(1736)年の蔵人所牒(写)1通で構成されています。かつてこの地域で栄えた産業史を研究し、また地域の来歴を知る上で貴重な文化財です。なお、津田家文書も平成12年度に一括市指定となっています。



こいどうい もじかんけいしりょう
■五位堂鑄物師関係資料

五位堂銭(繪銭)

【収蔵資料、展示は不定期】

時代:明治時代

法量:径4.5cm

五位堂銭は貨幣類似品で、繪銭とよばれる種類のものである。江戸時代中期以降、明治時代中期前後頃まで製作されており、福神像や駒引き、巴紋、海老、家紋など、いろんな図柄がある。通貨として流通していたものではなく、子どもの玩具として、また信仰用具として作られたものと大別されるようである。鑄物師職人が残り湯を使って製作した、遊び心あふれる作品である。



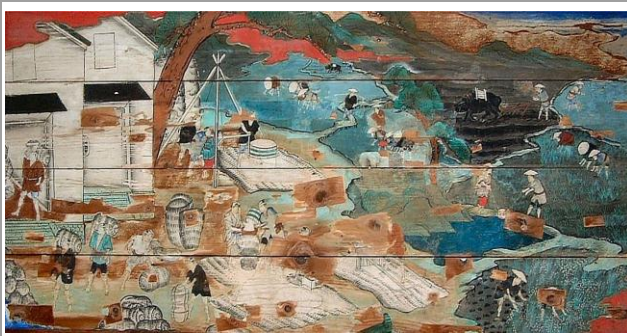
五位堂鑄物師関係資料
■五位堂鑄物師関係資料
 杉田家鑄造用具・製品

香芝市指定
文化財

【収蔵資料、展示は不定期】
 市指定第29号(平成19年3月23日指定)
 時代: 明治~昭和時代(推定)
 内訳: 鑄造用具53点、鑄造製品59点

五位堂鑄物師の杉田家が経営していた杉田鑄造所の鑄造用具・製品の一部です。五位堂鑄物師は梵鐘鑄造が著名ですが、主な製品はやはり日用品の鍋釜や農具類です。とくに五位堂鍋、五位堂備中鍬は五位堂ブランドとして定着していました。

鑄物生産は、大正から昭和時代初期にかけて量産に適した製法等が導入されて、近代的鑄物工場への脱却が図られました。本資料は、古来の伝統的工法である真土型法(惣型法)で鑄造されており、かつてこの地域で栄えた鑄物産業史を研究する上で貴重な資料となります。



四季耕作図絵馬
■四季耕作図絵馬

香芝市指定
文化財

【寄託資料、展示は不定期】
 市指定第4号(平成6年3月29日指定)
 時代: 明治時代中期(推定)
 法量: 縦88cm、横188.5cm
 所有者: 巖島神社(五ヶ所)

巖島神社拝殿に掲げられていた農耕絵馬で、初まき始まり、田植え、稲刈りなどを経て、俵を蔵に運ぶまでの一連の農作業12場面が鮮やかな色彩で描かれています。舶来の絵具が使用されていること、額装の四隅の組み方が明治時代の絵馬と共通すること、奈良県内に残る5面の絵馬と比較して、明治時代中期頃の作と推定しています。江戸時代後半から明治時代にかけての農村風俗を知る上で貴重で、今後ますます重要な意味をもってくるものと考えられます。